

農村RMO 立ち上げマニュアル

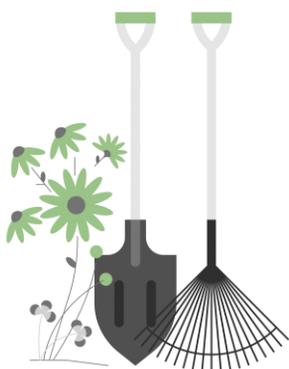


はじめに

本県の中山間地域※¹は、経営耕地面積及び農業産出額の約4割を占める重要な地域です。また、中山間地域における農業生産活動は、食料生産だけでなく水源涵養、土砂崩れを防ぐ、豊かな自然の美しい景観や生き物の住処を守るなど、県内全体に及ぶ効果をもたらしています。

一方で、県内の農業従事者数※²は、平成22年から令和2年の約10年間で、23,013人（約40%）減少しています。このため、農業生産活動や生活環境支援など、農村の「くらしづくり」を担う農村RMO※³により地域課題を解決し、持続可能な発展の実現に向けた住民の意見や行動を基盤とした地域コミュニティの維持・強化が求められています。

県では、令和5年度から農村RMO形成や育成を支援していくこととしており、本書が、地域の皆さまの農業生産活動を始めとした地域コミュニティの活性化に向けた一助となれば幸いです。



- ※1 農林統計の農業地域類型区分における「山間農業地域」及び「中間農業地域」
- ※2 15歳以上の農家世帯員で過去1年間に自営農業に従事した者
- ※3 Regional Management Organization

もくじ

1. 農村RMOの基本概念 P. 3
2. 農村RMOの進め方4ステップ P. 4-9
3. 農村RMO運営時の大切な7つのポイント P. 10
4. 農村RMO立ち上げ時の苦勞 P. 11
5. 事例集 P. 12-22

1. 農村RMOの基本概念

農村RMOとは？

農村RMOとは、農用地の保全や農業を核とした地域コミュニティの維持・強化に取り組む組織です。地域で活動する様々な団体が連携し、機能を補完し合うことで成り立ちます。持続可能な活動のための体制づくり、収益確保を行いながら、多様な活動に取り組めます（以下は一例）。



農用地の保全

- ・遊休農地の管理や活用
- ・農道の補修、草刈り
- ・用水路の泥上げ、草刈りなど

遊休農地の活用、農道整備、有害鳥獣捕獲など、農用地の適切な管理と生産活動を実施します。



地域資源の活用

- ・農産物の加工・販売
- ・都市部との交流
- ・農泊やグリーンツーリズムなど

地域特有の資源（食、自然、歴史など）を掘り起こし、付加価値の高い経済活動を行ないます。



生活支援

- ・移動集荷・販売
- ・高齢者の見守り、移動支援
- ・子育て支援など

高齢者の買い物支援や子育て支援をはじめとする、地域住民サービスを提供します。

▼ 例えば、以下のような組織・団体があります。

- ・ 集落協定
- ・ 老人会
- ・ 自治協議会
- ・ P T A
- ・ 観光協会
- ・ 集落営農組織（法人）
- ・ 婦人会
- ・ 自主防災組織
- ・ 社会福祉協議会
- ・ N P O法人
- ・ 多面的機能支払交付金の活動組織
- ・ 自治会（町内会）
- ・ 公民館
- ・ 商工会 など



関係人口の増加

住民、移住者、出身者、学生など、さまざまな立場の人が集うきっかけになります。



地域の魅力発信

活動により、多くの人に地域の魅力が伝わります。住民が地域を再発見する機会にもなります。



高齢者や若者の活躍の場を創出

できること・得意なことを持ち寄ることで、地域における役割とやりがいが生み出されます。

ー 農村RMO設立のメリットー



持続可能な地域経済

これまでボランティアで実施されてきたことも、有償化・高付加価値化を模索できます。

2. 農村RMOの進め方、4ステップ

農村RMO事業は、大きく、以下の4ステップで進められます。



- 選定のポイントは？
- 課題解決への機運は？



この間、何度も会議やワークショップなどを重ねます。時間はかかりますが、とても大切な作業です。



参加者減少・担い手不足が起こりやすい

- 同じ思いの仲間をみつめよう！
- 思いを共有しよう！
- 現状を把握しよう



途中でメンバーの思いにすれ違いが起こることもあります。上手にコミュニケーションを取りましょう。



- どんな組織体制にする？
- メンバーの役割は？
- コミュニケーションを取ろう
- 目標を設定しよう

- 次世代へ繋いでいこう

それぞれのステップについて、詳しく見ていきましょう。



STEP 1 地域の選定

活動の範囲（地域※）を選ぶ

※複数の集落

① 課題解決の可能性

地域課題に対してアクションを起こしている団体がある。

② さらなる活動発展の見込み

①の活動を広げていきたいと考えている。

③ 住民の意欲

地域住民が前向きに取り組むエネルギーがある。

④ 公的な優先度の高さ

自治体にとっても支援優先度が高い地域課題である。



STEP 2 立ち上げ準備

客観的データをもとに議論を重ね、住民の合意形成を図ります

① 思いを共有し、仲間をあつめる

● 思いを共有

同世代の知り合い、地域の核となる人物（キーパーソン）などへ思いを伝えます。

● 仲間を集める

思いに共感し、一緒に動いてくれる仲間を集めます。小人数から始め、キーパーソンや各地域団体の役員、集落支援員などと連携し活動の輪を広げます。

● 地域へ伝える

思いの共有、仲間の輪を地域全体へ広げていきます。

② 背景の明確化

● 地域住民の当事者意識を育む

地域の現状を地域全員が把握し、地域住民と一緒にやりたいことや目指す地域の将来像を踏まえ、団体を設立する目的を明確にします。

3 現状分析

- 統計データの活用

人口推移、年齢分布などの統計データを参照します。

- 住民の意識調査

住民目線の魅力や課題、やりたいことを聞き取ります。

- 地域資源の調査

自然、文化、人など、地域の宝物を挙げていきます。

- SWOT分析  P.13から解説

複数の要因を、強み、弱み、機会、脅威に分類して考えます。

- マッピング

出し合った意見を地図に落とし込み、「見える化」します。

- 目的の明確化

担い手不足、「なんとかしたい」という意欲の高まりなど、団体の設立を後押しする背景を明確にします。

4 資金をあつめる

- 財政・資金の確保

まずは、地域住民や地元企業からの出資の呼びかけやクラウドファンディング、行政と連携した企業版ふるさと納税の活用を検討しましょう。また、地域の取り組みに合致した行政の支援制度（補助金）を調べて相談します。継続的な活動とするために農村RMOとして収益事業へ挑戦することも検討してみましょう。





STEP 3 設立と運営

いよいよ団体を設立し、
具体的な活動が始まります

① 団体の設立手続き

● 理念を決める

理念とは団体として大事にしたい考え方です。

自分ごととして考え、互いを尊重しながら、地域が目指す姿を言語化します。

● 組織体制づくり

団体の活動目的と内容に応じた組織体制を構築します。既存組織をどう活かすかがポイントです。複数の既存団体が集まって新団体を設立したり、組織力のある既存の団体が活動主体となったり、農村RMOの組織づくりは柔軟です。

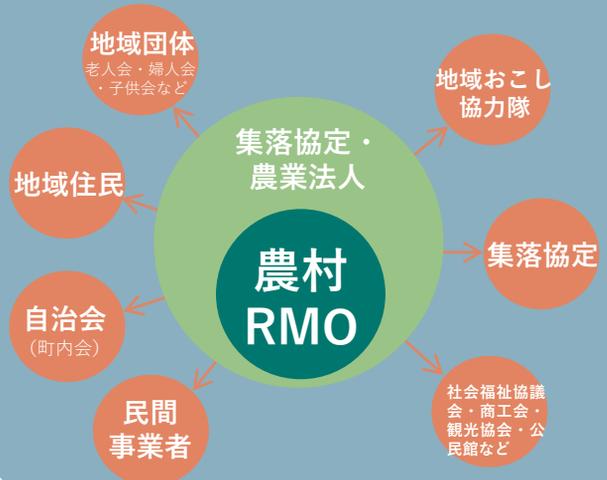
新団体設立型

(それぞれの組織が連携し新組織を設立)



農業団体主体型

(農業に関わる組織の活動)



● 役員・スタッフの 選出

団体の代表、活動テーマ（遊休地対策、空き家対策、子育て支援など）ごとのリーダー、構成組織をつなぐハブ役などを決めます。誰がどんなスキルを持っているか把握しておくことで、適材適所の役割分担ができます。

② 目標設定

● 短期中期長期の目標

農村RMOの目的を実現するための、段階的な目標を設定します。短期は基盤づくり、中期は数年後を見据えた継続と展開、長期は最終的に達成したいことを、具体的に考えます。

③ 活動の開始

● 取り組み方

いきなり大きな事業に着手するのはリスクを伴います。少ない人手とお金でできることから始めることが大切です。

「今よりもう少し工夫すればできる」達成が見込める活動計画を立てましょう。

● 組織内のコミュニケーション

全員が気軽に意見を出せる環境をつくりましょう。活動の過程から成果までを、可視化・言語化して共有することで、メンバーそれぞれが主体的に取り組めます。

④ 取り組みの継続

● 振り返りと改善

活動を通して見えてきた課題や成果を共有し、次に活かしましょう。

「やってよかった」「楽しかった」という気持ちは、継続への活力になります。ときには状況の変化に合わせて柔軟に変えることも大切です。

● トラブルシューティング

計画倒れ、メンバーの意欲低下、住民の主体性が低いなどのトラブルはつき物です。自分たちがどんな将来像に向かって活動しているかを常に確認・共有し、メディア取材の折は住民に発言してもらおうなど、やりがいと責任感を育む工夫をしましょう。

● 地域内外の人材を活用

取り組みを継続するには、人材の確保も重要です。地域内に限らず、地域おこし協力隊や地元企業など、地域に対する思いを持つ人を仲間にする 것도効果的です。



STEP 4 引き継ぎ

活動が軌道に乗ってきたら、
次の世代に引き継ぎます

1 属人化を防ぐ

● 仕組みづくり

取り組みのノウハウを熱意あるリーダーだけが把握している状態（属人化）は避けるべきです。組織の連携体制がもろくなってしまいます。仕組みをつくり、適宜引き継ぎを行ないながら活動を進めることで、継続した地域づくりが可能になります。

● 対策例

業務の棚卸とマニュアルの作成、情報共有の機会を増やす、メンバー間の自由な議論を促進するなど。

2 若い世代を巻き込む

● 対策例

地域の子どもが主体的になれる活動を実施することで、親世代の関心や参加が高まり、次の世代の育成に繋がります。

3. 農村RMO運営時の大切な7つのポイント

POINT

1

地域資源の活用

いま、あるものを活用しましょう。誰にとっての課題なのか。課題に一番近い人の意見を大事にしましょう。代表者の意見が地域の課題とは限りません。例えば、地域住民（中学生以上）向けにアンケートを実施することで、埋もれている地域課題を発掘できることがあります。また、既存の取り組みにも改めて目を向けましょう。地域内交流や、話し合いの場づくりも大切です。身近な何気ないと思っていたものが、視点を変えたり、多様な地域資源を組み合わせることで、新しい価値を生み出し、課題をチャンスに変えられるかもしれません。

POINT

2

住民参加の促進

行事に顔を出す、相談窓口を設置するなど、住民が気軽に農村RMOメンバーと話せる環境を整えます。参加者が、世帯主や団体の担当者のみだったり、女性や若者がいなかったりしませんか？参加者に縛りを設けたり、参加を強制したりしてませんか？子供たちに地域の一員として活動への参加を促すことで、活動について親世代の関心が寄せられ、様々な視点（世代）からの意見が生まれ、さらなる「地域ぐるみ」の活動に発展します。小さく、ゆるく、長く取り組めるよう多様な人（若者、母親、父親、移住者、地域おこし協力隊など）が関わる地域を目指しましょう。

POINT

3

無理のない役割分担

役割を担当ごとに明確に設定すると、活動が負担になることがあります。出来るひとが、出来る範囲で活動し、負担を平準化してみましょう。また、マニュアルを作成しておく、急な引き継ぎなどもスムーズに行えます。

POINT

4

情報共有の徹底

チャットツールなどを活用し、メンバー間で常に情報を共有しましょう。会議や報告会に出席できなかったひとに伝わるように議事録を作成しましょう。意見を吸い上げる仕組みをつくることも大切です。



小さな成功体験の積み重ね

小さな成功を住民と共有し、活動参加者の満足度を上げる工夫を行いましょう。「無理なくできること」を積み重ね、成功体験を自信にします。

他地域の成功事例を学び、自分たちの活動に活かすことも重要です。



持続可能性の確保

業務のマニュアル化や、次世代の担い手へ引き継ぎをしっかりと行うことで、地域づくりを仕組みとして継続できます。活動を次の世代に引き継いでいくうえで、地域の若手や子どもたちを巻き込み、一緒に活動することで、子どもたちの地域を思う気持ちが育まれ、次の世代の育成に繋がります。



外部組織の活用

内閣府の「地域活性化伝道師」など外部伴走支援制度や行政や中間支援組織を活用しましょう。

他地域の農村RMO協議会と積極的に情報交換を行い、活動における課題や問題点を共有しましょう。



4. 農村RMO立ち上げ時の苦勞

その1

住民間の合意形成



意見の対立が起こりやすく、一部の人が主導すると不満が生じ、合意形成でつまづくことがあります。参加意欲に温度差があり、具体的なビジョンが共有されにくいことがあります。

地域のキーパーソンの力を借りて、丁寧なコミュニケーションを重ねましょう。

その2

人材不足



特定の人に責任と仕事が集中し、役員や実務担当者が偏ることで疲弊してしまい活動が続かないことがあります。

できることから小さく着手し、マニュアル化などで業務の属人化を防ぎましょう。

その3

初期資金の確保



やりたいことはたくさんあるけれど、お金がないし、収益事業を始めるには人手は不足し、時間もかかるという時は、無理のない小さな規模で少額な取組をお試しで始めてみましょう。

自信がついた取組から補助金の活用などを検討しましょう。

その4

住民との祖語

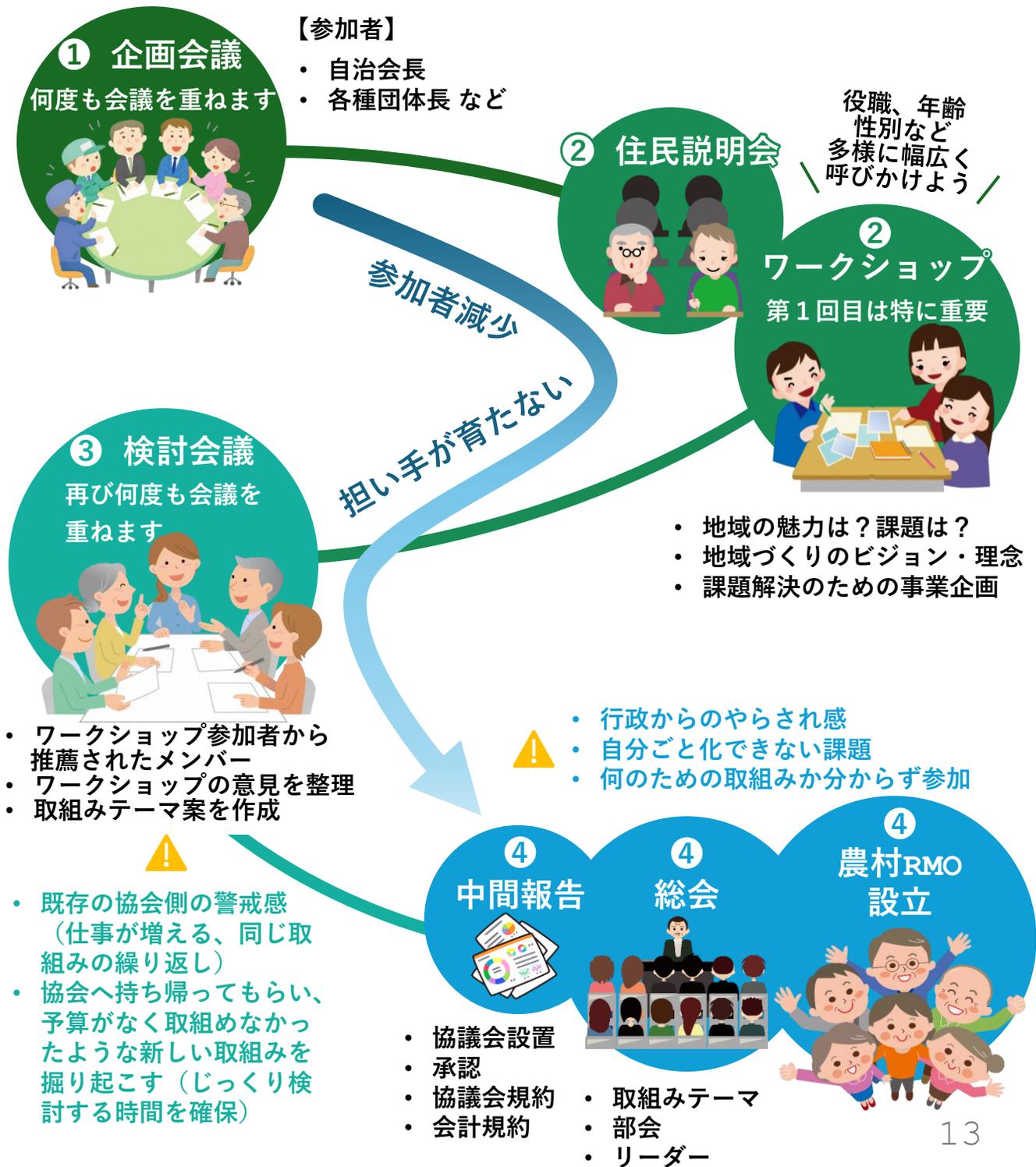


活動の目的やメリットが十分に伝わらない、活動が「特定の人たちのもの」と見られたり、勇み足に活動した結果、住民を置いてきぼりにしてしまい、住民の協力が得られなかったり、不満が噴出してしまふことがあります。

焦らず、丁寧なコミュニケーションを大切にしましょう。

農村RMO組織設立のフロー

農村RMO設立までのより詳しい流れは以下のようになります。



自分たちの強みや弱み把握し今後の戦略を立ててみましょう

環境分析と戦略のフレームワークSWOT分析とクロスSWOT1

SWOT分析とは



Strength
強み



Weakness
弱み



Opportunity
機会



Threat
脅威

SWOT分析（スウォット分析）とは、団体の事業や業務の現状を把握するためのフレームワークで、団体の内部環境と外部環境を「強み」「弱み」「機会」「脅威」の4つの要素に分解して分析することで、課題や戦略を導き出します。

▼（例）農村RMOにおける地域を取りまく環境分析の例

内部環境（組織内部）

強み（Strength）

地域のネットワークとの信頼関係

地元の農家との強固な関係を築いており、これにより地域特有の農産物の供給を確保できます。地元の農家から直接仕入れた新鮮な商品を提供できることは大きな強みです。

コスト競争力

農産物を安価に提供でき、消費者にとっても魅力的です。

地域資源の活用

特産品や有機農産物など、地域資源を最大限に活用し、他地域と差別化を図れる点が強みです。

弱み（Weakness）

販路の限界

伝統的な販売方法に依存している場合販路が限られ、都市部や広域市場へのアクセスが困難です。オンライン販売や物流網の整備が不十分な場合、売上拡大の障害になります。

資金不足

農村RMOは、資金力に限りがあり、大規模な広告キャンペーンやマーケティング活動に投資できないことが多いため、ブランドの認知度向上に苦勞することがあります。

人材不足

農村地域では、特に若者の労働力が不足しており、農村RMOの運営に支障をきたすことがあります。また、専門的なマーケティングや管理の知識を持った人材の不足も問題です。

外部環境（社会・経済・競合環境）

機会（Opportunity）

● 都市部市場への進出

都市部の消費者の間で、健康志向や地元産品への関心が高まっています。このため、都市部のスーパーマーケットやオンラインプラットフォームを活用して販路を拡大する機会があります。

脅威（Threat）

● 競争の激化

他の地域の農産物や大手企業が市場に進出してくると、価格競争が激化し、利益率が低下する可能性があります。特に大手は資金力があり、大規模な広告や流通網を活用できるため、農村RMOは競争力を失う恐れがあります。

観光業との連携

農村地域の観光業の活性化と連携することで、農産物の販売促進が期待できます。観光地での直販所や農業体験プログラムを通じて、地元産品を広く紹介できます。

行政支援プログラム

農村振興や地域経済の活性化を目的とした政府の支援や補助金が増加しており、これを活用することで資金調達が可能です。

気候変動の影響

農業は天候に大きく依存しているため、気候変動による影響（干ばつ、豪雨など）が農産物の生産量に悪影響を及ぼし、安定供給に支障をきたす可能性があります。

市場の変化

消費者の嗜好やトレンドが急速に変化する中で、農産物の需要が予測外の方角に進む可能性もあります。例えば、健康志向が高まりすぎて、特定の農産物の需要が減少することも考えられます。

▼実際に、自身の団体に当てはめて考えてみましょう。

内部環境（組織内部）

強み（Strength）

弱み（Weakness）

外部環境（社会・経済・競合環境）

機会（Opportunity）

脅威（Threat）

次に強み弱みと機会を活かした戦略を考えてみましょう

環境分析と戦略のフレームワークSWOT分析とクロスSWOT2

▼ (例) 農村RMOにおける戦略検討の例 (P14.15の続き)

- ① SO 戦略 (強み × 機会) : 強みを活かして機会を最大化する戦略
- ② WO戦略 (弱み × 機会) : 弱みを克服しながら機会を活かす戦略
- ③ ST 戦略 (強み × 脅威) : 強みを活かして脅威を回避する戦略
- ④ WT戦略 (弱み × 脅威) : 弱みを最小化し、脅威に対応する戦略

① SO戦略 (強み × 機会) = 強みを活かし、チャンスモノにする方法

都市部市場への進出において、地域のネットワークと信頼関係を活用し、信頼性の高い商品を都市部の消費者に提供する。観光業と連携し、観光地で地元の特産品を販売することで、地域資源を活用したブランディングを行う。行政支援プログラムを活用して、コスト競争力を強化し、都市部市場での競争力を高める。

② WO戦略 (弱み × 機会) = 強みを活かし、脅威の影響を受けないようにする方法

行政プログラムを活用し、販売チャンネルを広げる。観光業との連携により、農産物を観光地で販売する機会を活かし、資金不足を補うための新たな収益源を開拓する。資金不足を克服するために、行政機関の補助金や支援を受け、地域おこし協力隊など必要な人材を確保する。

③ ST戦略 (強み × 脅威) = 弱みを克服し、チャンス逃さない方法

競争の激化に対して、地域資源や特産品を活かした差別化戦略をとり、地域ならではのブランド力を強化する。気候変動に備え、地域の農家と連携して多様な農産物の供給を確保し、気候変動の影響を最小限に抑える。市場の変化に対応するため、地元消費者のニーズに応じた商品開発を行い、柔軟に対応できる体制を構築する。

④ WO戦略 (弱み × 機会) = 弱みを克服し、脅威の影響を受けないようにする方法

販路の限界を乗り越えるため、都市部やオンライン市場へのアクセス強化と並行して、低コストでの物流網整備を行い、柔軟に対応する。資金不足と人材不足を解消するため、地域おこし協力隊や、外部の専門家等を活用し、資金調達を行い運営効率化を図る。気候変動に対応するため、持続可能な農業技術を導入し、リスクの管理を徹底する。

事例集

山鹿市・天草市・山江村・八代市



農村RMO設立の経緯、組織体制、取り組みのポイント、立ち上げの苦勞、組織運営時のコツなど、皆さんが気になるポイントを、地域の事例とともに紹介します。



山鹿市

菊鹿さきもり隊

2年目

<SNS>

Instagram : sakimoritai_agribu

HP : <https://sakimori.net>



◆ 農村RMO設立の経緯

平成7年、地域おこし団体「菊鹿さきもり隊」を結成。地域の魅力PR活動を通して複数の集落や組織が協力し合う流れができ、農村RMOの形成に至りました。「番所棚田」の保全と再生を核とした、持続可能な集落機能の確立を目指しています。

◆ 組織体制

令和7年3月時点

菊鹿さきもり隊を実施主体に、3つの集落協定（番所、一区、オドシ）、社会福祉協議会、福祉団体で構成。農用地保全是、菊鹿さきもり隊（営農部）と3つの集落協定で実施します。

菊鹿さきもり隊（事務局：山鹿市）

農用地の保全

菊鹿さきもり隊
（営農部）
番所集落協定
一区集落協定
オドシ集落協定

地域資源の活用

菊鹿さきもり隊

生活支援

山鹿市社会福祉協議会
福祉団体

* 菊鹿さきもり隊は、地域の祭りの企画運営を行っており、そこから有志の参画で農村RMOに取り組んでる。

活動のポイント

● 番所棚田の魅力アップ

本年度は水稻に大豆と蕎麦も作付けし、彼岸花とのコントラストでひと味違った風景づくりに挑戦しました。彼岸花の開花が遅れたことで、予定通りとはいきませんでした。きれいな蕎麦の花を見ることができ、活動を頑張ったご褒美のような気分になりました。今後は「番所の棚田」を核に景観維持を図りつつ、ワーケーションプログラムや体験型イベントの開発、地域行事の復活などを目指します。活動拠点として、廃校などの活用を検討しています。

● 情報発信強化

農村RMOのロゴを作り、キャッチコピー「番所がますます楽しくなる！」を設定。WEBサイトやSNSを強化して、我々が楽しみながら活動に取り組む様子を発信しました。

● 農用地の保全

農用地利用の意向調査をもとに保全計画を策定しました。また、チームによる営農活動や石垣復旧ワークショップ、草刈りや水路清掃を行なっています。

● 生活支援

自治会行事がほぼなく、老人会も解散しているため、地域の中で支え合う仕組みづくりが必要です。現状とニーズを把握し、組織団体と協議による取り組みを計画・策定しました。

1年目（令和5年度）の取り組み

農用地の保全

① 番所集落協定農用地意向調査



【生産】

遊休農地40%

果樹など50%

米の作付10%

【施設】

水路：被災1ヶ所、要改良1カ所

石垣崩れ：2ヶ所

鳥獣被害の拡大（防護柵）など

② 石垣崩壊2カ所の復旧



令和2年豪雨で被災（石積崩壊）し、復旧されていない農地方面を、景観に配慮し原型で復旧するためワークショップを行ないました。

地域資源の活用

① 米のブランド化

無肥料・無農薬栽培による、米のブランド化（高付加価値）を行いました。

作付面積／棚田11枚（30a）

内訳）うるち米棚田10枚（収穫430kg）

もち米棚田1枚（収穫170kg）



② 餅つき

地域づくり団体と連携し餅つきイベントを実施し、神社へ鏡餅としてお供えをしました。他団体と連携することで、相互理解や協力体制が構築されるため、今後も継続の予定です。



生活支援

① 各種団体との協議

一般社団法人やまが恩送りの会

番所地区の現状説明や、農産物集出荷、買い物・送迎支援、見守りなどについて、当団体が提供する「支え合いサービス」の実証可能性について協議を行いました。

山鹿市社会福祉協議会

高齢者などへの生活支援については、地域の中で支えあう仕組みの構築が必要であり、今後計画づくりや実証事業について、両団体と連携していくことで合意を図りました。

② 将来ビジョン策定状況

メンバーミーティングにて、グラフィックレコーディング*による番所地区の将来ビジョンを検討。

*ミーティング内容をイラストで記録し、共通認識を高める技法。



2年目（令和6年度）の取り組み

農用地の保全

① コメの無肥料・無農薬栽培（継続）



昨年度から継続している米のブランド化で、今年度も草刈りや稲刈りを実施しました。

② 大豆・蕎麦の試験栽培



在来種である「みさお大豆」と蕎麦を試験的に栽培しました。コメ同様に無肥料・無農薬栽培です。

③ 校区内の小学生向け講演



“見つけよう伝えよう菊鹿のじまん”というテーマで、番所の棚田について講演しました。

地域資源の活用

① どんどや



地元では開催しない方向性であった「どんどや」を自治会・消防団・住民の協力を得て復活開催しました。

② 空き家利活用WS



空き家の利活用についてワークショップを開催しました。現地の空き家視察も行い、空き家利活用を協議しました。

③ 情報発信



自走化に向けた体制整備として、HP制作やインスタグラムで地域の魅力を発信しました。

④ しめ縄づくり

矢谷阿蘇神社のしめ縄づくりに、伝統行事の継承としてさきもり隊も参加しました。

⑤ 納豆づくり体験

わらづと納豆づくりのワークショップを行い、伝統技術の継承として地域住民の方にご指導いただきました。

⑥ 先進地視察研修

(株)あさぎり商社へ視察に行き、地域資源活用方法について学びました。

生活支援

① アンケート調査



社会福祉協議会と連携し、アンケート調査を実施しました。

② 社協との連携



次年度の生活支援の実証内容について意見交換を行いました。

③ 移動販売車運行開始



地域の要望を受け、週一回の移動販売を開始しました。20

立ち上げ時の苦労について

● 地域の理解と賛同の得方

代表：まずは「スモールスタート＝できる範囲をできるだけ」。地域作業に参加し、その中で対話を重ねていきました。様子見の積み重ねも大事です。

会員：別事業（地域プロデュース事業）の絡みで地域と関係者を巻き込みました。

● 財政面の課題

代表：補助金頼みの活動ではなく、自治体職員と連携のうえ、「取り組みありき」で国や県の補助金を活用しています。

● 組織内の役割分担

代表：押し付けるのではなく、メンバーが自発的に行動できるよう調整しました。

会員：各メンバーのスキルを把握し、役割を分担。移住者等の外部人材を起用しつつ、地域内の新たな人財発掘も進めています。

● 活動目標・方針設定

代表：事務局と協議して素案を作成し、定例会で意見交換を行なって決めました。メンバー間でどうしても温度差があるので、互いを知りながら方針を共有できるよう工夫しています。

● 行政・外部団体との連携

代表：何に対してどんな協力を得たいのかを明確に提示し、協力をあおぎました。

会員：市の協力隊や福祉部門と協力体制を構築しています。

● 活動の持続可能性

代表：地域住民との共通認識をふまえ、「地域で稼ぐ！」という意識を保ち続けることが鍵です。活動継続のためには、資金調達の仕組みづくりが必要です。

運営のコツと課題との向き合い方

● メンバーコミュニケーション

代表：LINEグループで連絡事項を共有し、必要に応じて少人数打合せを実施。会議内容の共有にはグラフィックレコード（アイデア、疑問などを視覚的に記録すること）を活用し、議論の過程や展開をわかりやすくしています。

●モチベーションの維持方法

代表：お互いの意見をしっかり聞いて、作業を強要しないこと。対価の保障も重要です。メンバーが交流を深められるよう、飲み会などの場を設けています。なにより、自分が一番に動くこと！

会員：活動の目的を明確にすること。地域と密に交流し、関係性を維持しています。

● 運営の効率化

代表：年間スケジュールの共有や仲間集め（分母を増やしてひとりの負担を軽減）などを、模索中です。

会員：部門ごとにリーダーを設置していません。外部との連携も、もっと模索したいです。

● 地域の巻き込み方

代表：SNS、チラシなどで情報を発信して認知度をアップ。イベントなどを実施する際は、伝統行事や技法の指導を地域の方に依頼しました。

会員：保育園や学童に、農村RMOが関わるイベントへの参加を促しています。

● 外部団体との関係構築

代表：情報共有と対話はもちろんですが、現場に出るといことも大切にしています。

会員：学校をはじめとする教育機関との連携を強化しています。



天草市

宮地岳みらい里山協議会

1年目



◆ 農村RMO設立の経緯

ユニークな表情で訪れる人々を和ませる「かかし祭り」で知られる、天草市宮地岳地区。地域のテーマは「挑戦できるまちづくり」です。高齢化による担い手不足を解消し、活気あるまちづくりを推進するために、「宮地岳みらい里山協議会」を発足しました。

◆ 組織体制 令和7年3月時点

集落の農地を管理する営農組合がベースとなり、宮地岳10集落、中山間組織などからメンバーが集まって構成されています。複数の組織に重複して携わっているメンバーも多数います。

宮地岳みらい里山協議会

農用地の保全

- ・ (農) 宮地岳営農組合
- ・ 宮地岳農地・水保全会
- ・ 宮地岳集落協定
- ・ 鳥獣被害対策班 (捕獲隊)
- ・ ドローン調査隊

地域資源の活用

- ・ (農) 宮地岳営農組合
- ・ 竹やぶ隊 (食品加工)

生活支援

- ・ (農) 宮地岳営農組合
- ・ ドローン調査隊
- ・ 宮地岳集落協定

* 宮地岳みらい里山協議会は、(農) 宮地岳営農組合を母体として農村RMOに取り組んでいる。

活動のポイント

● 商品開発

地場の素材を活かした味噌、菜種油を開発中です。パッケージデザイン、ブランディングもRMOメンバーで取り組んでいます。製造は外部委託ですが、将来的には自社生産を目指しています。また、余剰の竹をメンマにするため、ペースト状にできないかを模索中です。

● 農用地保全活動

コンバインをリースし、農地保全活動に役立てています。高齢化で作業がままならない農地へオペレーターと共に派遣しています。

● 竹藪整備隊&鳥獣捕獲隊を結成

大きな地域課題となっているのが、竹藪と害獣対策です。管理が行き届かない竹藪の整備 (刈り取りなど) を実施するほか、鳥獣被害調査などを行なってその情報を共有しています。

🌸 立ち上げ時の苦勞について

● 地域の理解と賛同の得方

代表：宮地岳は、もともと多様な組織（営農組合や中山間組織など）のある地域です。日頃から活発に交流しているため、理解・賛同を得やすかったです。

● 地域住民の意見の取り入れ方

会員：地域住民へアンケートを実施しました。自然な形で地域住民の意見を反映できたと思います。また、地域行事を通して日ごろからコミュニケーションを図っています。

● 財政面の課題

代表：初期費用はまったくなかったことで中山間地域補助金を活用しました。しかし、手続きが煩雑で事務局の対応が大変でした。

● 組織内の役割分担

代表：農村RMO設立の際、他組織とも協議のうえで役割を決定しました。若手が活躍してくれています。

● 行政・外部団体との連携

代表：商品開発などは、地区振興会を巻き込んで実施しています。市担当者とも密に連絡を散り合っていますが、複数の組織に事務局が向いて話をする大変さはあります。

● 活動の持続可能性

代表：高齢者が多く、若い世代は少ない人数で知恵を絞る必要に迫られています。モチベーション維持は正直難しいです。一方で地域の結束力は強く、心強く思います。数年後までを見据えた仕組みづくりが必要です。

🌸 運営のコツと課題との向き合い方

● メンバーコミュニケーション

代表：LINEを活用して情報を共有するとともに、日ごろの会話も心がけています。

会員：会議やLINE以外でも、住民として集まる場で話すようにしています。

●モチベーションの維持方法

代表：役割を与えることで、やりがいや責任感につながると考えます。適宜、交流の場を設けてコミュニケーションを図っています。

● 運営の効率化

代表：特定の人（特に事務局）に負担が集中しがちです。人任せにせず、みんなで携わるという意識づけが大切です。効率化と同じくらい、泥くさくやり続けることも重要だと考えます。

会員：適材適所でうまくいっています。

経費申請がややこしいので、取り組みやすくしてほしいです。

● 地域の巻き込み方

代表：広報誌を活用して農村RMOの活動を周知しています。「一部の人がやっている」と思わせないように気をつけています。

会員：子育て世代をどう巻き込むかが今後の課題です。

● 外部団体との関係構築

代表：行政や外部団体主催のイベントや有識者会議には積極的に参加しています。自治体とは密に連携し、意見交換会（懇親会）を行なって関係を構築しています。

会員：わからないことがあれば市役所の担当者へ問い合わせるなどして、密にコミュニケーションを図っています。



山江村

山江村未来づくり協議会

1年目

HP <https://www.vill.yamae.lg.jp/>



◆ 農村RMO設立の経緯

かねてより活動してきた「山江村観光交流促進協議会」のうち、住民参画による村づくり組織「山江村未来塾100人委員会」を中心として、農村RMO「山江村未来づくり協議会」を発足。地域が一体となって農業生産から資源管理、生活扶助まで幅広く取組み地域コミュニティを守ることが目的です。

◆ 組織体制 令和7年3月時点

「山江村未来塾100人委員会」を中心に、村内の団体から合計18名で構成されます。事務局機能は村の企画調整課が担います。

山江村未来づくり協議会

農用地の保全

- ・自治会（区長会）
- ・農業委員
- ・農事組合法人
- ・若手農業者

地域資源の活用

- ・山江村観光交流促進協議会
- ・山江村石蔵活用拠点整備基本構想検討委員会
- ・山江村総合公園建設検討委員会

生活支援

- ・民生委員
- ・教育委員
- ・商工会
- ・山江村議会

* 山江村は、村全体で立ち上げた平成28年「山江村未来塾100人委員会（9部会）」を母体に、当委員会を更に発展させ「山江村観光交流促進協議会」を設立後、農村RMOに取り組んでいる。

活動のポイント

● 山江村の将来ビジョンを描くワークショップ

令和6年度は事務局主導のもと、村の将来ビジョンの策定に取り組みました。堅苦しい会議にならないようワークショップ形式にしたことで、村の魅力、課題、もっとこうだったらステキだよね...などと和気あいあいと楽しく議論ができた印象です。4度のワークショップや各種研修を経て、少しずつ「山江村の将来ビジョン」の輪郭が見えてきたように感じます。

■ 協議会ビジョン策定ワークショップ



立ち上げ時の苦勞について

● 地域の理解と賛同の得方

代表：「山江村観光交流促進協議会」メンバーを中心に、農村RMOの委員を委嘱しました。かねてより「山江村未来塾100人委員会」が活動していたこともあって、地域住民のまちづくりに対する意識も醸成されており、農村RMOの設立はスムーズでした。

● 財政面の課題

代表：農村RMO事務局は村（企画調整課）が担っており、お金の支払い・受け入れについても村予算の内で扱っています。予算から支出するための手続きにはどうしても時間がかかりますが、今年度は話し合い（ワークショップ）が中心だったので、スムーズに対応できました。

● 組織内の役割分担

代表：会長・副会長は農村RMOメンバー（委員）の互選により決めました。事業については、事務局（役場企画調整課）主導で進めています。

● 行政・外部団体との連携

事務局：次年度以降、さまざまな団体との連携による展開を見据えています。事務局としても全力でバックアップする構えです。

● 活動の持続可能性

代表：できることから、少しずつ。無理をしないで継続することが当面の目標です。

運営のコツと課題との向き合い方

● メンバーコミュニケーション

事務局：情報共有や意思疎通は円滑に進んでいた印象です。特に女性は、コミュニケーション能力が高いなど、感心します。会議の際は、お菓子やジュースを用意して場を和ませる工夫をしました。事務局では把握しきれていないコミュニティや人間関係も多く、山江村の人財の多様さに驚かされます。

● 事務局としてのサポート

事務局：農村RMOメンバー（委員）はボランティアで参加してくださっています。メンバーの皆さんが楽しみながら農村RMOの活動に携われるよう、事務局として配慮しています。

● 地域の巻き込み方

事務局：現時点では、まだメンバーと事務局が中心の活動です。次年度

以降、地域住民をどう巻き込んでいくかを模索中です。

● 農村RMOの役割と今後の展望

村長：農村RMO形成にあたっては、コミュニティが最も重要です。地域の小さなコミュニティを再構築しながら、山江村全体の「産業」「土地利用」「住民の暮らし」をどのように守るかを話し合い、描いた山江村の将来像の実現に向けた法人としての地域運営活動が、地域の支えにつながっていけばと考えています。

事務局：次年度以降は協議会職員が中心となって活動を展開できるよう、計画しています。活動によっては村関係課や外部団体との調整が必要になると考えますが、村がバックアップすることで協力を得たいです。



◆ 農村RMO設立の経緯

「しょうがと石工の里」、八代市東陽町。八代平野から九州山地の山間に入った場所にあり、自然豊かでのどかな地域です。しょうがの生産においては、GI（地理的表示）登録を取得しており、全国的にも希少性が高い。農業の後継者不足解消のために、空き家を活用し、新規就農者の確保を視野に入れ、農村RMOの活動を展開しています。

◆ 組織体制

令和7年3月時点

東陽まちづくり協議会の「山村部会」の一角に、東陽農村RMO協議会が加わる形で組織形成されています。地域には「生姜部会」や「柑橘部会」などの組織があり、各部会のリーダーが農村RMO構成員になっており、会長・副会長（2名）・事務局を含む役員が中心となり、20名ほどで活動をスタートしました。

東陽町RMO協議会

農用地の保全

- ・東陽グリーンツーリズム協会
- ・JAやつしろ生姜部会
- ・JAやつしろ柑橘部会
- ・東陽町特殊農産物部会
- ・東陽山椒部会
- ・(株)橋永農園
- ・中村耕作所
- ・くろファーム
- ・農業委員

地域資源の活用

- ・まちづくり協議会山村部会
- ・東陽グリーンツーリズム協会
- ・東陽加工グループ協議会
- ・東陽道の駅

生活支援

- ・チーム東陽
(移住定住
ワンストップ窓口)

* 東陽農村RMOは、農業関係従事者を母体に農村RMOに取り組んでいる。

活動のポイント

● 空き家利活用のための調査

区長の協力を得て、町内の空き家を調査。100軒以上の空き家が確認されており、今後は移住者向けにリノベーション計画を立てていき、新規就農者が町内で家を確保できるように受入れ体制を整えていく予定です。

● 新規就農者の取り込み

生姜の栽培をはじめ、晩白柚を中心とする柑橘やブルーベリーの栽培を後継者に繋いでいくために、畑付きの空き家を活用し、新規就農者（移住者）の確保をしたいと考えています。農業体験をはじめ、町内で交流できるイベントを通じて関係人口を増やし、農業への関心を深めていこうとしています。

● 農業体験（生姜収穫）の計画

東陽町の特産でもある生姜の収穫体験ができるよう、生姜部会を中心に若手農業者も協力して、体験用圃場の整備を行いました。地域の方に取組みを理解していただきながら、植付けから収穫までのイベント開催、また生姜を使ったレシピ開発を含め計画を進めています。

立ち上げ時の苦勞について

● 地域の理解と賛同の得方

代表：区長さん、東陽まちづくり協議会とその各部会（「まちおこし」「スポーツ文化」など協議会を構成する部会）の協力を得て、農村RMO設立に漕ぎつけました。

会員：類似の組織がすでにあるなか、農村RMOという組織の目的、どんな活動をするのかというイメージの共有、必要性の説明に苦勞しました。設立反対意見はありませんでした。

● 財政面の課題

代表：支所から補助金などの情報を提供してもらっていますが、申請や事務が複雑です。設立初期の補助金対象期間外は費用がかからないよう事業を実施しましたが、年度当初の活動か

ら補助対象にできる制度設計をお願いしたいです。今後の農村RMOの自走に向けても、資金調達は課題ですね。

● 行政・外部団体との連携

代表：組織内に、部会・団体の長がいることで、交渉しやすいです。

会員：支所の担当課には、設立段階からサポートいただいています。活動にあたっては、区長会などにも多大な協力をいただいています。

● 活動の持続可能性

代表：地域の特産品のしょうがで事業展開を考えています。定例会議で、アイデアがいろいろ出ることを期待しています。

運営のコツと課題との向き合い方

● メンバーコミュニケーション

代表：LINEを活用し、情報や活動の様子などを共有しています。

会員：会議はオンライン参加も可能。気軽に参加できます。

● 活動目標・方針設定

会員：設立当初から現時点に至っても、明確にはしきれていないように思います。まずは地域行事などに参加しながら、農村RMOの活動に結びつけていきたいです。

● 組織内の合意形成

代表：農村RMOの役員を中心にある程度の方向性をまとめた後、全体会議を行なってメンバー内で議論しています。

● モチベーションの維持方法

代表：会議は短くてもOK。なるべく参加し、メンバーと顔を合わせています。

会員：農村RMOとしての動きが鈍いことがモチベーションの低下につながってしまっていたため、LINEで情報共有や意見交換をこまめに行い、みんなで楽しく取り組める雰囲気づくりを心がけています。

● 役割分担と効率化

代表：メンバーに「どう関わってもらうか」が大切。会議等への参加人数が少なかったり、LINEへ反応するメンバーが限られてしまったりと、課題を感じています。専門分野の方の協力を得たり、作業前にLINEで告知したり、みんなを巻き込んで進みたいです。

会員：特に事務局機能を担う人材の確保に苦慮しています。メンバー内で、役割分担を話し合っているところです。

● 地域の巻き込み方

代表：農村RMOの活動は、まだまだ町全体に伝わっていません。回覧板やケーブルテレビを活用してPRしています。

会員：市の支所担当課にも農村RMOの事務局に入ってもらい、地域住民と協同で運営に関わってもらうことで情報共有を図っています。

● 外部団体との関係構築

代表：メンバーの皆さんが、まちづくり協議会の何らかの部会に所属しています。そこの集まりなどで情報交換をしています。

